

西方見聞録(No.3)

ベトナム(越南)の風



Hotel Regent in SAIGON 10階部屋から撮影

2005年(平成17年)3月29日

澤井篤司

ベトナム(越南)の風

ベトナム、ホーチミン空港(タンソンニャット空港)に降り立ったのは深夜23時ごろ。空港内は出迎えの人の渦で溢れている。誰か著名人が乗り合わせていたのか、不思議に思いながらガイドに導かれバスに乗る。気温は現在32℃とのこと。まだ雪景色が残る北海道との気温差は40℃を超える。6時間の飛行が季節を冬から夏に変えた。ベトナムの夜には心地よい爽やかな風が吹いていた。バスの車窓から深夜だというのに行き交うバイクの波が見える。人で溢れかえる空港内と車両の騒音。この喧噪が道中の疲れを一気に取り払ってくれた。

ガイドは現地人のMr.^{コン}Coong(37歳 既婚)。コンさんはホーチミン大学日本語学科を卒業したエリート。(ベトナムの大学進学率は5%、そのなかでも外国語学科とくに日本語学科は難関という)ホテルまでの車中、バスのなかでコンさんの説明が続く。

「空港での大勢の人の出迎えの光景、驚かれましたか? ここベトナムでは毎日のこと、日常の光景なのです」

1975年4月30日、南ベトナム政権の崩壊と共に大勢の旧政権関係者を中心とした人々や就学就職差別や経済苦に苦しむベトナム人たちがボート・ピープルやランド・ピープルとなって国外に脱出し始めた。こうした難民をフランス(9%)、カナダ(10%)、オーストラリア(10%)が受け入れ、最大の受入国になったのがアメリカ(60%)であった。

米越国交も正常化されておらず、彼らは永い間、祖国とは隔絶された状況におかれていたが、ベトナム経済が天災や計画経済の失敗により困窮の一途を辿るなか、家族に送金や物品の仕送りを始める。

在米ベトナム人からベトナムに送られた物資の総額は1979年からの10年間で約5億ドルにのぼり、ベトナム政府は彼らを敵ではなく積極的に彼ら「越僑」を同胞として積極的に活用することが討議され、「刷新」路線採択直後の1989年より、全ての「越僑」に入国ビザを発給することになったのである。

堰^{せき}を切ったように祖国ベトナムに里帰りする越僑達、思い続けてきた家族との再会。一家総出で出迎える熱い光景はホーチミン空港の日常風景なのである。

未だ戦争の深い傷跡を残すここベトナムにあつて勤勉さと明るさに満ちあふれた国民。旧跡を辿りながらわかってきたこの国の凄惨^{せいさん}な歴史。ドイモイ(刷新)^{さいしん}後、社会主義体制のまま急速に資本主義化し発展する経済。

神秘的で不思議な国ベトナム4日間の旅の記録をここに^{しる}記す。

第一節 ツアー行程

今回のツアーは新日本石油（株）北海道チニタ会（特約店青年経営者会：チニタとはアイヌ語で”夢”）のメンバー、杉江社長（杉商）、千徳専務（千徳商事）、小林社長（小林本店）、栗林社長（栗林商会）、木賀次長（木賀商店）そして私の6人と、新日本石油北海道支店の加藤副支店長の同行による7名で千歳を出発した。

ツアーと書いたが、実はれっきとした「研修旅行」である。目的は「ベトナム海上油田」の視察。新日本石油のグループ会社である新日本石油開発（株）が威信を賭けて開発・生産している油田のひとつである。

3月9日 12:45 新千歳空港発
18:00 成田空港着から全日空でホーチミンへ
(所用時間：6時間40分。時差は▲2時間)
22:40 ホーチミン空港着
23:15 ホテル レジェンド到着

3月10日 08:30 ホテルチェックアウト
11:30 ブンタウ着
ヘリコプターによる海上油田見学
(往復搭乗時間 約90分)
日本ベトナム石油（株）訪問
(海上油田のレクチャーを受ける)
シーサイドレストランで会食
ペトロハウスホテル（ブンタウ）泊

3月11日 08:30 ホテルチェックアウト
シクロにて高速フェリー乗り場へ
フェリーでサイゴン川を上る
ホーチミン市内観光
(統一会堂、サイゴン大教会、
中央郵便局、ベンタン市場など)
18:00 市内ホテルにて民族舞踊の夕食
ホーチミン ホテル レジェンド泊

3月12日 08:30 ホテルチェックアウト
クチトンネル観光、ホーチミン市内観光
23:50 ホーチミン空港発

3月13日 07:15 成田空港着



Hotel Regend in SAIGON
(日越合名会社による経営)



Petro House Hotel



聖母マリア教会前で

第二節 ベトナムという国

今回の旅は移動距離を最短にするため「千歳」－「成田」－「ホーチミン」というルートを取った。羽田を経由しない代わりに便数制限がつき、行きは成田 18 時発、帰りはホーチミン 0 時発という日程（3 泊 5 日）であった。

ベトナムは首都ハノイのある北部、中部、南部に大きく分けられ、気候風土そして文化もそれぞれ違う。国名は「ベトナム社会主義共和国」、人口は約 8,100 万人。

我々が今回訪れたところはベトナム南部であり、ホーチミン市、ブンタウ、クチをまわった。南部はフランス植民地のなごりがあり、その主要都市ホーチミン（旧サイゴン）は「東洋のパリ」ともよばれる美しい町である（人口 530 万人）。



公用語はベトナム語で、観光地施設以外では日本語はもちろん英語も通じなかった。まずこの旅行記を記す前にベトナムという国をざっと纏めてみる。

国名

ベトナム (VIET-NAM) という国名は、ベトナム自身がつけたものではない。初めてベトナムを統一した王朝に対して、中国の清朝が名付けさせたものである。「ベトナム (ピエット・ナム)」は漢字で「越南」と書く。

※ 1802 年ベトナム最後の王朝となるグエン王朝はナムビエット（南越）にしたいと申し出たのだが、清朝は許可しなかった。紀元前 207 年、秦朝に対して反逆した政権は南越と名乗り、秦滅亡のあと成立した漢王朝を大いに悩ませた史実があるからである。この南越（“越南”は南越を逆に読んだものなのである）こそがベトナムの歴史の始まりである。

歴史の概略

ベトナムの歴史は、アジアの国際関係史でもある。A 軸（中国軸）と B 軸（東南アジアおよび世界軸）が絶えず交差し、からまりあって成立している。乱暴に纏めると、紀元前からはじまる中国の 1000 年の支配（抵抗の 1000 年）、その後 100 年近くにわたるフランス植民地時代、日本の進駐、1945 年に日本が連合国に無条件降伏したのをきっかけとして、ホー・チ・ミン（胡志明）率いる独立同盟がベトナム（越南）民主共和国を樹立。この北部の共産主義勢力を中心としたベトナム民主共和国に対抗して、南部にベトナム共和国（サイゴン政府）が樹立された。アジアを揺るがせたベトナム戦争が始まり、30 年にわたる戦争ののち、1975 年春、サイゴン陥落によりベトナム共和国は消滅し、翌年、南北統一の「ベトナム社会主義共和国」が樹立され、現在に至っている。

地形

ベトナムは S 字型をした国であり、北は中国、西はラオスとカンボジアに接し、南北 1600km にわたって細長く伸びている。(最も狭い部分はわずか 50km ぐらいしかない)。面積は約 33 万平方キロ、日本は 37.8 万平方キロだから、日本の土地から九州と秋田県を除いた広さになる。日本と同じように非常に山が多く、四分之三が山岳地帯で、残りの四分の一が平野部である。平野部は北のトンキン(紅河)デルタと南のメコンデルタの二大デルタ(三角州)がある。

メコンデルタはベトナムの一大穀倉地である。農業の二大生産地である二つの穀倉地を天秤(アンナン山脈)で担いでいるのがベトナムだといわれるのは、こうした地形からきている。

気候

ホーチミン市を始めとする南部では最も寒い時(1月)でさえ 20℃以上という熱帯モンスーン気候であるが、今回行った3月は乾期(11月から4月まで)に当たり、雨が少なく湿気が高くくないため、汗ばむことはあまりなかった。

(涼しい季節とは言っても、日中気温は連日 35℃を超える。クーラーの効いているバスと建物の往復だったから耐えられたのであろう)

通貨

ベトナムの通貨はベトナムドン(VND)。紙幣の種類は100ドンから始まり10万ドンまでの10種類。アメリカドルは使えるが日本円は使えない。ガイドに5000円を70万ドンに両替してもらったので1円≒140ドンくらいであろう。貨幣価値は日本の15～20分の1くらいか。

ベトナム人の平均所得(月給)は10,000円～12,000円位らしい。米ドルはどこでも通用し、むしろ自国通貨より喜ばれる。チップの習慣はないが、観光地では要求される場合がある。ちなみにホテルでのピローチップは5,000～10,000ドンあるいは1ドル。日本円にすると50円～100円くらいか。

ほぼ1ドル≒100円≒10,000ドンと考えればわかりやすい。



メコン川河口に広がるメコンデルタ
ベトナム屈指の稲作地帯である



10万ドン紙幣(ホーチミン肖像画)

食べ物

食べ物は正に豊富と言って良い。新鮮な生野菜を多く使うベトナム料理はヘルシーで美味。歴史的にベトナムは長い中国支配を受けてきたため、ベトナム料理は中国料理と似たものが多いが、中華ほど脂っこくなくあっさりした味つけのものが多い。ヌクナムという小魚から作られる魚醤（日本でいう醤油）が調味料である。

主食は米であるが、日本の米と違ってパサパサに炊く。麺類が豊富（代表的なのがフォー）で、そのうえフランス植民地時代の名残りのフランスパンまである。今回行ったレストランやホテルでの料理はどれもとても美味しかった。フォーからフランス料理までのバリエーションに豊富な魚介類、ベトナムはフルーツ天国と言われるが、タンロンやマンクットなど普段目にしない豊富な果物にも驚いた。

（今回のツアーに出た料理集は別紙に記載）

水道水は飲めない。ホテル内でもミネラルウォーターが必携である。国産ビールは「333（バーバーバー）」、サイゴンビール。何と合弁会社で日本酒もある（銘柄は「越の一」）。



フォー：米粉のうどん



服装（ファッション）

ベトナムでは「刷新（ドイモイ）」のなかで、伝統文化への再評価が進み、アオザイ姿が目につくようになってきている。高校生の白いアオザイ姿はステータスにもなっているようだ（高校進学率は地域によって異なるが50%内外らしい）

空港、ホテル、レストラン、観光土産店でもカラフルなアオザイを着た女性が目に入る。全て体にフィットしたオーダーメイドで、観光土産としても人気である。ベトナムの女性は皆、スリムでスマート。太っている人はいない。

同行者の話によると、バスの車窓から初めて太った人がアオザイを着ている後ろ姿を見たとのことだが、通り過ぎるとき確認したら日本人だったらしい（笑）。また菅笠を被った女性も目につく。菅笠はノン（ノンラ）と呼ばれ、ベトナム女性のシンボルでもある。バーム（ヤシ科）の葉を干したもので作られ、膠を塗る。日光から首、顔全体を守り、雨をはじき実用的である。（もしかしてゴルフにも適するのではないだろうか。OB球からも頭部を守るし・・・（笑））紙面が足りなくなったので、男性の服装は割愛する。



高校生の白のアオザイはステータスにもなっている



ノンは農場だけでなく街中でもよく見かける

第三節 ベトナム海上油田

わが国最大の石油会社である新日本石油 (<http://www.eneos.co.jp>) グループの上流部門 (石油・天然ガス開発) を一手に引き受けるのが「新日本石油開発 (株)」 (2003 年度売上高 800 億円、当期利益 180 億円 <http://www.noex.co.jp/j/index.html>) である。世界 10 カ国において原油・天然ガスの探鉱、開発および生産事業を展開しており、5 カ所の海外拠点 ロンドン (イギリス)、ヒューストン (アメリカ)、ブンタウ (ベトナム)、クアラルンプール (シンガポール) およびミリ (マレーシア) を構えている。そのなかで生産量で群を抜いているのが東南アジア (石油生産量で全体の約 4 割) である。東南アジアは、今後も、原油・天然ガスの生産を通じて、生産数量の拡大と安定的な利益貢献が期待できる新日本石油グループの重要なコア地域であることが今回の視察場所に東南アジア (今回はブンタウ (ベトナム)) を選んだ理由である。

ここベトナムで新日本石油開発 (株) は 53.13 % の出資による日本ベトナム石油 (株) (以下 JVPC) を設立し、1992 年にベトナム沖 15-2 鉱区の権益を取得、同鉱区においてオペレーター (操業管理会社) として操業している。

操業は新しく、1994 年に試掘 1 号井でランドン油田を発見し (※1)、1998 年 8 月に同油田北部地域からの生産を開始、その後同油田の中部地域および南部地域からの生産も開始し、パートナーであるベトナム国営石油会社 (ペトロベトナム) やコノコフィリップス社と協力して順調に生産を続けている。

- ※1 '92 年鉱区取得後、地質調査を繰り返した後、1000 カ所掘って 2、3 カ所しか当たらない” ヤマシのビジネス” と言われる油田採掘 (千に三であることから” せんみつ” とも呼ばれる) であるが、このランドン油田は一回掘ってズバリ的中させた奇跡とも言われた油田である。海外メジャーに日本の技術力の高さを大いに鼓舞した。



10 日 13 時、ブンタウのヘリポートに到着、JVPC の田中副所長、吉田氏からランドン油田の概略の説明を受けた後、チャーターしたヘリコプターに搭乗、14 時にランドン海上油田へと飛び立った。プロペラの騒音のため同乗者同士の会話はできない (防音のためヘッドホン着用)。片道 40 分の空の旅である。



眼下には田園風景、そして長さ 4km にわたる白浜ビーチが広がる。ここブンタウ (Vung Tau) は 1 年中海水浴が楽しめるビーチリゾートである。ホーチミンから車で 2 時間半と近いので週末はたくさんの海水浴客で賑わう。ブンタウのもうひとつの顔が石油産業である。沖合にはタンカーや外国船が行き来し、石油産業がベトナムの GDP の 1 割を担うほどになっているとのことだ。



離陸から約 40 分、約 100km の海上飛行の後、眼下に巨大な油田施設が見えてくる。JVPC が開発する 15-2 鉱区ランドン油田 (BLOC 15-2 Rang Dong Oil Field) である。

タンカーの先端で随伴ガスが燃えている。正に今、原油が生産されているのだ。新日本石油グループ上流部門の最上流先端の光景である。



タンカーを改造した FPSO-RD 1
(貯蔵量 80 万バレル)



ランドン油田は、世界でも例の少ない花崗岩質基盤岩内に発達したフラクチャー (岩石の割れ目) が貯留層となっている

油田であり (中東など砂漠の油田とは違い、硬い岩盤の隙間に原油が入りこんでいる構造)、JVPC は、このフラクチャー評価技術を向上させるとともに、水平坑井 (岩石の割れ目に沿って掘り進める) や水圧注入により効率的な油田開発を行っている (水深は約 50m)。

原油生産量は 48,000BD (※ 2) とのことで、昨年 (2004 年 10 月) に同油田からの累計原油生産量が 9,000 万バレルに達したとのことである。

(※ 2) BD = バレル / 日 : 1 バレルは 159 リットルであるから、1 日に 7,632,000 リットル、ドラム缶 38,000 本の原油が毎日生産されていることになる。

復路 90 分の空からの油田視察を終え、JVPC へと向かった。

JVPC が入っているビルは小高い丘の上に立地し、高級ビジネス街でもひととき目立つ近代的な高層ビルである。エレベーターで上階に登ったところに JVPC 事務所がある。入り口には今見てきたばかりの FPSO-RD 1 (タンカーを改造した前処理貯蔵施設) の模型が目を引く。



FPSO-RD 1 の模型

事務所の窓から見える眺望は素晴らしい。眼下にブンタウの街、遠くに陽に照らされ輝くサイゴン川が見える。

会議室で小休止の後、高橋所長がにこやかに入ってこられ、JVPC の概要とランドン油田の詳しい説明と展望が語られた。



高橋史郎氏 新日本石油開発（株）執行役員
兼 JVPC 常務取締役ベトナム事務所長



田中 晃氏 ベトナム事務所副所長（写真右）
吉田宏樹氏 ベトナム事務所社員（写真左）

JVPC の概要

JVPC は新日本石油開発が53.13%、石油公団が約44%、三菱商事が残り約3%を出資し平成3年に設立された（資本金225億円）。ベトナム政府とは生産分与契約（PSC）を結んでいる。簡単に言うと、JVPC はベトナムの管理地を借りて油田開発を行っている。開発費は JVPC の全面負担であるが、仮に原油が生産された場合、売上の相当部分がベトナム政府に帰属される。

このランドン油田（15-2 鉱区）の権益は JVPC46.5%、ベトナム国営石油会社 PetroVietnam 社の石油開発会社が 17.5%、米国コノコ社が 36.0%を有しており、先の生産分与契約（PSC）も含めると総売上の約 25 %が JVPC の実売上だということである。

中国ではよくルール変更（中国側に有利なように中途での契約変更、あるいは新規制）があると言うが、JVPC はベトナム政府と友好的な関係を保っており、順調に業績を上げている。

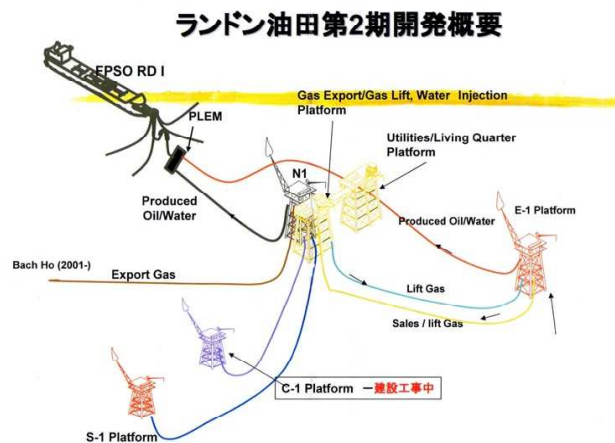
生産される原油はたいへん良質（低硫黄）で、高硫黄の中東原油の精製・脱硫装置を有する日本国内の精油所で精製するには逆に無駄なコストがかかるため、ほとんどを隣国中国に輸出しているということである（中国では生焚き^{なまだ}か）。

JVPC の採算は現状の原油価格（売価）に左右される。20 ドル／バレルが採算ラインということなので、現在の原油価格（50 ドル）では相当の収益を確保できる。

ランドン油田の概要と今後の展望

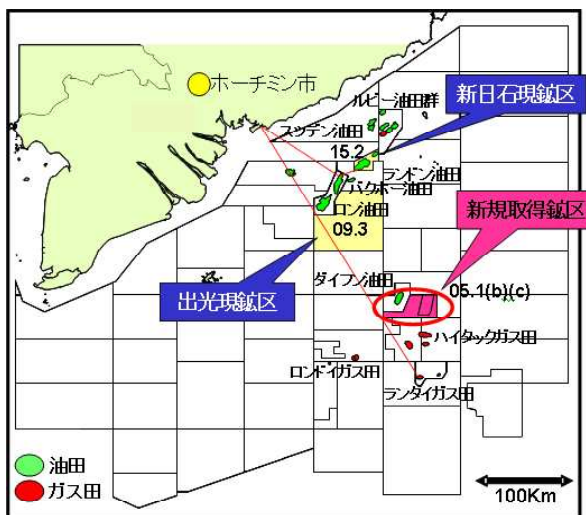
ランドン油田では生産数量の維持と更なる拡大を目ざし、油層を管理しながら複数の生産井（platform）を掘削している（次図参照：E-1、S-1 の E は East、S は South の意味）。つまり 1 カ所のプラットフォームから水平坑井するより経済効率的な掘削が可能となることである。現在、C-1 platform を新たに建設工事中とのことである。

また、ランドン油田では、それまで焼却処理していた原油の生産に伴って産出されるガス(随伴ガスという)を、ベトナム国内の発電所へパイプラインで輸送し燃料として使用を開始(図中 Export Gas)、このガス有効利用事業を、クリーン開発メカニズム(CDM:Clean Development Mechanism)として、京都議定書関係機関へ登録中であり、将来、温暖化ガスの排出権を取得できると期待されているとのことである。



ランドンとは現地語で「オーロラの東」の意味とのこと

さらに、ベトナムでの新たな事業展開として、出光オイルアンドガス開発(株)および帝国石油(株)と共同で、ベトナム南部海上 05-1 (b) (c) 鉱区の権益を取得(権益比率はJVPC および出光オイルアンドガス開発(株)が各 35%、帝国石油(株)が 30%)。油ガス田に隣接しており、新たな油ガス田の発見が期待される。(試掘作業は、2006 年を予定)。



説明を受けるメンバー

ベトナム地域貢献の一貫として社会福祉活動にも力を注ぐ。耳や言葉が不自由な子供達への支援、操業 10 周年では小学校の建設資金を寄付した。



JVPC 受付カウンター前で

後列中央はベトナム人(受付)。地域貢献のため現地雇用を進める(ベトナム人の雇用は約 100 人、日本人は 17 名、その他国籍 50 名)。

第四節 ベトナム交通事情 —SS見学—

進むモータリゼーション

ベトナムにもモータリゼーションの波が押し寄せている。前報で「上海」の交通事情を取り上げたが、ベトナムは少し様相が違う。

交通ルールが希薄なところは共通しているが、ここベトナムで我々の目を引いたのは溢れんばかりのバイクの数である。(国内で4,000万台)

そのほとんどは中国・韓国製バイクであるが、日本製(ホンダ)も走っている。ホンダ製のバイクは高級であり、ベトナム人の憧れになっているとのことだ。

信号機のある交差点は少なく、先行者優先(先に入った者が優先)である点は上海と共通している。

我々を乗せたバスがクラクションを鳴らしながら躊躇なく突っ込み、バイクの波を掻き分けて行く。

事故は多発していると言うが(実際、我々も接触事故を目撃した)、渋滞に近い状態のためスピードはさほど出しておらず、重傷事故は稀とのことである。



ホーチミン市内



光と排気ガスから身を守る

バイクを運転している人を見ると、我々の常識外の格好で運転している。ほとんどがサンダル履きで、なかにはアオザイ姿で運転している女性もいる。市外の高速道路(有料道路)はヘルメットが義務づけられていると言うが、市街地を走るほとんどが無着用である。バイクを運転している女性を見ると、顔のほとんどを覆うマスクをしてしている人が多い。日焼け防止の意味もあるが、道路が排気ガスで充満しているためであると言う。

道路はコンクリート舗装が整備され、どこまでもまっすぐな道路が続く。ベトナムは社会主義国家であり土地は全て国家のものであるため、整備がしやすいのだろう。

至るところで工事が進んでいる。増え続けるバイクと車両。道路整備が進めば進むほど、車両も増え続けるのがモータリゼーションの姿である。車両増加とインフラ整備のイタチごっこがこれからも続くのだろう。



進むインフラ整備

環境問題と社会規制(交通ルール等)。これからのベトナムのテーマになることは想像に難くない。

風を切る

ホーチミン市内をざっと回ってみたが、娯楽施設は多くない。市街地は個店（商店街）と路上販売があるだけで、総合デパートらしきものは数カ所である。郊外にボリング場（高級レジャーとのことだ）やショッピングセンターらしき物が見えたが、歩いて行く距離ではない。海水浴場のブンタウはホーチミンから2時間半もかかる。よってベトナム人にとってバイクは生活必需品であり、重要な娯楽道具でもある。週末になると目抜き道路はバイクで溢れかえる。

ガイドのコンさんによると、暑苦しい日（夏は連日 30 度を超える熱帯夜が続くが、クーラーはまだ普及されていない。水も決められた量しか使えない）には、バイクで風を切^{うなず}って走^{うなず}ることは最も快適な暑さ対処法であるとの説明は頷ける。

ガソリンスタンド (SS) 見学

増え続けるバイク（車両）にかかせないのがガソリンスタンド (SS) である。ホーチミン市内にもSSは点在している（郊外にも多い）。

郊外のさほど混んでいないSSを見学させてもらった。

隣地との防火壁はなく、アイランド周りも雑然としていたが、私服でサンダル履きの社員が人なつこい笑顔で迎えてくれた。

計量器は4基あり、高オクタン価ガソリン（ハイオク）1基、レギュラーガソリン2基、軽油1基があり、価格はそれぞれ7,800ドン（56円）、7,500ドン（54円）、4,850ドン（35円）であった。

そのうち税金部分はわからないが、ベトナムの物価を鑑^{かんが}みても高いと思われた。先にベトナムでの石油産業はベトナム全体のGDPの1割を担うまでにな

っていると書いたが、実はベトナムで産出される原油は国内で商品化（精製）されていない。精油所がないため石油製品は全て諸外国（多くはシンガポール）からの製品輸入である。政治的要因により精油所の建設プロジェクトは頓挫したままになっているらしい。



資源大国ベトナム

ベトナムの資源と聞いて一般の人が真っ先に思う物は何であろうか。農作物（米）、フルーツ、豊富な魚介類……。どれも確かに豊富であるが、実はこの国、資源の筆頭に挙げられるのは原油である。1987年当時はソ連とベトナムの合弁会社のベトソフペトロが、細々とバックホー油田で生産を始めたにすぎなかった。その後は、シェル（蘭）、トータル（仏）、BP（英）、BHP（豪）、新日石（日）、モービル（米）、オキシデンタル（米）など多彩な顔ぶれが揃っている。埋蔵量は東南アジア最大の産油国インドネシアに匹敵するものである。原油の次は米である。ドイモイ後、生産を急カーブで上昇させ、輸出外貨を稼いでいる。他に伝統的な無煙炭、ボーキサイト、金、宝石、鉄鉱石などがある。

第五節 戦争の傷跡

戦争で塗られた歴史

ベトナム視察研修の話聞いたとき、私は正直言って参加することに躊躇した。ベトナムと聞いて、まず最初に脳裏に浮かんだのが右の写真である。1966年にピューリッツァー賞を受賞したという澤田教一氏の一枚の写真、「戦火を逃げまどう一家」。泣きながら母親にしがみつく子供、母親の腕には幼児が抱かれている。



「戦火を逃げまどう一家」

澤田教一氏 撮影

そして映像として思い浮かぶのが、戦争時の人の狂気を描いた「地獄の黙示録（監督：フランシス・コッポラ）」である。ヘリからワーグナーの「ワルキューレ」を大音響でスピーカーから鳴らしながら、奇声を発し、機関銃を乱射するシーン。山をもろとも焼き尽くすナバーム弾を炸裂させるなかサーフィンを楽しむアメリカ兵。巨大火柱が脳裏に突き刺さる。学生時代にみたこの写真と映画の強烈な印象がベトナムという国の上に今も覆い被さっているのだ。



「地獄の黙示録」

Apocalypse Now（1980）

凄惨な戦争の歴史を持つベトナム、しかし歴史とは言ってもベトナム戦争終結は1975年。まだ30年前のことであり、ベトナム人にとっては、ついこの間の出来事なのである。

何も知らない自分が、研修視察とはいえ物見遊山でこの地を訪れているのか。自問自答の後、参加することを決め、出発前までこの国の歴史を紐解く夜が続いた。

ベトナムの歴史は正に戦争の歴史であり、抵抗の歴史でもある。ベトナムは中国に通算、1,500年以上も統治・迫害されていた。20世紀は中国、フランス、日本、アメリカという大国との戦いにその歳月のほとんどを費やしてきた。その戦いのなかで、同じ民族が「大国」の側につく人と「民族自決」の側に別れ、同民族同士の悲惨な戦いも繰り返されるといふ悲劇がある。伝説化されたベトナムの偉人は中国と戦った人ばかりとのことだ。フランスとの戦いの歴史は150年ほどあるが、ベトナム人にとってはまだ近年のことなので、まだ伝説化には至っておらず、アメリカとの戦いはつい昨日のことなのだ。今やっと、戦いのない平和が訪れているのである。

我々世代の記憶に微かに残る、対アメリカとの「ベトナム戦争」とは何だったのか。1995年に元国防長官のロバート・マクナマラは、その回顧録のなかで、ベトナム戦争は「間違った戦争」であったと告白している。

激戦地だった「クチ」に足を伸ばし、この戦争の軌跡を辿ってみる。

ベトナム戦争

ベトナム戦争は実に複雑な戦争であった。第一に南ベトナムの内戦、第二に南北ベトナム間の戦争、第三に米ソの代理戦争、すなわち「冷戦のなかの熱戦」等の見方ができる。ベトナムにとってベトナム戦争は「抗米救国戦争」と呼ばれ、「二つのベトナムから「一つのベトナム」への独立建国への戦いであった。

これからの記述は第二次世界大戦後からベトナム独立（統一）までのことを記す。

ベトナムは長い植民地支配からの解放と国家統一を軍事的対決を経て成さなければならない宿命を背負っていた。1945年、ホー・チ・ミンはフランス植民地主義に反対し、ベトナム民主共和国（ベトミン政府）の独立宣言をする。1946年1月、全土で総選挙が行われ初代主席にホーチミンが就任した。しかし、いったんは独立を認めたフランスは、武力による再侵略を開始し、北部に中国、南部にイギリス軍、フランス軍が進駐した。これから1954年まで9年間続くインドシナ戦争（抗仏戦争）に突入する。1949年にフランスが親仏の「ベトナム国」を樹立させる一方、1950年に中国・ソ連がベトミン政府を承認し、ベトナムは「二つのベトナム」が併存することになる。長い戦いによりフランス軍は次第に消耗していき、フランスはアメリカに依存するようになっていった。1954年、ディエンビエンフーの戦いでベトナム側が歴史的勝利を収め、フランス軍は敗退した。同年、ジュネーブ条約が調印され、ようやくベトナム民主共和国は世界的に認知されたのである。しかしフランス軍は敗北したといっても25万人のフランス兵士はまだ武器を持ちベトナム国内に散らばっていた。その後、北ベトナム（ハノイ政府）では社会主義国家建設が遂行される一方、南ベトナムではアメリカがジェム大統領（サイゴン政権）を擁立し、親米政策が遂行される。いっせいに反米・反ジェム運動が巻き起こり、労働者・農民もアメリカの傀儡政権（操り人形）であるジェム政権に反発していく。ジェム政権に抵抗する集団は国家統一のため「南ベトナム解放民族戦線」（ベトコン）を結成、第二次インドシナ戦争が始まった。

ジェム政権は仏教徒の弾圧もしたため、他の仏教国からも反対世論が沸き、急激に国際問題となった。

アメリカもさすがにジェム政権を見放し、新たな新政府を確立し、1964年に北部へ爆撃を開始、ベトナムに本格的に軍事介入していき戦線はいよいよ泥沼化してくる。

1967年にはサルトルやラッセルがアメリカの行動を犯罪と断言し、また1969年にはソンミ村事件（右写真）が発覚。世界世論の激昂をかい、アメリカは世界から次第に孤立していった。

アメリカは世界世論に反発するかのようさらなる無差別攻撃に走り出す。広範囲火炎弾、毒ガス弾が投入され、ベトナム人は反米、親米問わず犠牲者が膨れあがっていった。



最大 50 万人の米軍が投入される



1968年3月ソンミ村で米軍による無差別虐殺事件が起きた。生き残ったのは5,6人に過ぎず、504人が殺された。大人180人、うち妊婦が17人、幼児56人を含む子供173人であった。

「フランス軍の拷問もひどかった。けれどアメリカ軍の拷問は人間性を欠いた酷いものだった」。こうした言葉が今も人々のなかに残る。

B52 戦略爆撃機による徹底的な北爆、50 万人を越す地上軍の突入、アメリカ国内も世論が二分するなか、当時のアメリカの可能な能力すべて投入して遂行された正にメンツをかけた全面戦争に突入した。しかしアメリカ軍の狂気はこれに止まらなかった。

この最大の問題に「化学兵器」の大量使用があるだろう。



「北ベトナムを石器時代に戻す」と称して空・海から大規模な爆撃を加えた

枯れ葉剤（ダイオキシン）大量散布の狂気

アメリカ軍は「森林に潜む коммуニストをつまみ出せ」を合い言葉に化学兵器である枯れ葉剤（ダイオキシン）を森林の 60 %以上に散布し、人間、自然を根絶やしにしようとした。写真家の大石芳野氏は語る。

「アメリカにはいつも理由がある。日本に戦争をやめさせ、500 万人のアメリカ兵士を救うと言って、広島、長崎に大量殺戮兵器（原爆）を投下し、共産主義の拡大を防ぐと言って化学兵器（枯れ葉剤ダイオキシン）を大量散布する」



枯れ葉剤で荒廃した森林

アメリカ軍は農薬の枯れ葉剤（2-4-5-T）をコードネーム「エージェント・オレンジ」と別名で呼び、ほぼ 10 年にわたって散布し続けた。これには1グラムで 2 万人を殺せるという猛毒ダイオキシン（2-3-8-TCDD）が1トン中に 10 グラムも含まれる特別高濃度なものであり、この猛毒が、推定数量 170 キロ以上も散布された。正に根絶やし作戦であった。



樹木の回復は未だにない

枯れ葉剤は味方であるはずのサイゴン政府軍の頭上にも降り注ぎ、その結果ベトナム兵は敵も味方も、命を削られる羽目になった。ベトナムは戦後、控えめながらも世界に向かってダイオキシン被害を訴えたが、西側は日本も含めて一様に「ベトナムの捏造であり、宣伝だ」と主張し、科学者やジャーナリストも認めようとする人はいなかった。

ここに 1 枚の写真を載せる。枯れ葉剤は環境を破壊すると同時に 200 万人以上を汚染させた。体内に蓄積する性質があるため、生まれた子に異常が出る。実は今でも被害は続き、第 4 世代目に入っているという。親は祟りといい、産科医院から姿を消すか、施設に赤ん坊が捨てられることが多いという。ベトナムの悲劇はまだ続いているのである。



医院に捨てられた子

クチトンネル

右が歴史遺跡区「クチトンネル」のパフレットである。ここクチはホーチミン市の西北 70 キロにあり、ベトナム戦争の有名な遺跡区である。ここでは、アメリカの最新兵器に対し、貧弱な武器しか持たなかったベトナム兵士がいかに戦い、勝利したかを書く。

以下、パフレットから引用しよう。(日本語訳あり)

”トンネルは深い地下にある坑道で、他に例をみない複雑な構造で知られています。その長さは 200 キロにも及び、内部はまるでアリの巣のように多くの階層や通路に分かれています。またトンネル内には作戦会議室やキッチン、宿舎、医療施設のほか、戦時中に使われた落とし穴などの罠があります。

このトンネルはクチの住民がいかに聡明で、かつ決然と戦争に立ち向かっていったかを表すものとして、ベトナム解放勢力の英雄的象徴とされています。これによってクチは「鋼鉄の土地、銅の城壁」と呼ばれるようになりました。”

クチほど凄惨な場所はないだろう。博物館に入るとビデオ（日本語）が上映されていた。アメリカの最新兵器と対等に渡り合える武器を持っていなかったベトナム兵士は木を削り、石を集め、あらゆる物を武器に使った。至る所に”落とし穴”を掘り、アメリカが落とす不発弾を改造し、地雷を作った。その一方、地中を手で掘り進め、巨大なトンネルを作った。そのトンネルはアリの巣のように分岐され、5階建てビルに相当する階層を持ち、その複雑な構造は決して敵軍に解明されなかった。内部には司令室など軍事施設もあり正に巨大な要塞である。このトンネルの総長は 200 キロにも及び、数千人のベトナム兵士がトンネル内で生活していたという。至る所に出口があり、またその出口は地上からは見えないように工夫されていた。内部は狭く、ベトナム人がやっと通れるくらいなので、大柄なアメリカ人は内部に入ることができない。アメリカ軍は入り口を偶然見つけると、手榴弾を投げこんだり、火炎放射、毒ガスあるいは水攻めと称し水を大量に注入したりしたが、この地下の要塞には様々な出口、そして罠が用意され、アメリカ軍に付け入る隙を与えなかった。



ホーチミンから
車で1時間



防空壕に避難
する子供達



壕の跡



クチトンネル：

ベトナム戦争時アメリカ軍を翻弄したのが南ベトナム解放戦線（ベトコン）。クチにその作戦本部が置かれていたトンネルがある。1948年から完成までは約 20 年。200km にわたりアリの巣のように広がるトンネルはサイゴン川にも抜けられるようになっている。今もそのトンネルは保存され、観光客に開放されている。トンネル内部は真っ暗で、想像以上に狭い。

「ベトコンは見えない兵士である」

トンネルを自在に使い、前から一斉に攻撃してきたかと思えば、忽然と消え、背後から突然襲いかかってくる。アメリカ軍のなかには精神異常をきたす兵士が続出する。アメリカ軍は山もろとも焼き尽くす作戦で、ありとあらゆる爆撃・空爆を続けたが、クチが陥落することはなかった。



トンネルの空気穴

アメリカ軍にも大量の死者が出始め、食料ルート断絶や枯れ葉剤散布にまでエスカレートする。ベトナム人は農民、女、子供も自ら兵士となり、アメリカ軍の死傷者も5万人に達した。B52 がベトナム軍にあまりにも撃墜されすぎて、これ以上ベトナムに投入すると、対ソ連軍事バランスが狂ってくる恐れもあった。

同時に「大儀なき戦い」だとする国際世論、アメリカ国内でも批判が強くなり、1973年1月、遂に米軍は南ベトナムから撤退する。

南ベトナムの内戦は継続されていたが、1975年4月30日、北の正規軍が南ベトナム大統領官邸に北ベトナム軍の戦車隊が突入して、南ベトナム（親米サイゴン政府）は崩壊し、30年に亘るベトナム戦争が終結した（サイゴン陥落）。

※ この戦争でのベトナム人の犠牲は 300 万人近いと言われている。



1975年4月30日 朝日新聞

翌1976年、「ベトナム社会主義共和国」として統一され、「一つのベトナム」が誕生した。

統一後の試練（ボートピープル）

戦争の混乱のなかで隣国カンボジアに成立したポル・ポト政権は、国内でカンボジア人の大量虐殺を行っただけでなく、ベトナムに対しても国境全域で攻撃を加えてきた。このポル・ポト政権を中国が支援したため、ベトナムは自国の安全保障に強い脅威を感じ、1978年末から大量のベトナム軍をカンボジアに侵攻させ（第三次インドシナ戦争）、ポルポト政権をプノンペンから追放した。



小さな漁船で脱出をはかる
ボートピプル

これが中国の反発を招き、1979年には中国軍が北部の国境地帯に新入して中越紛争が始まった（翌月撤退）。またベトナムはカンボジアを侵略しているとして、国際社会からも孤立してしまった。食糧難、生産の低下が続き恐慌状態が発生しているなか、南部で急激な社会主義的改造が行われ、大勢の旧政権（親米）関係者、中国系ベトナム人、生活困窮者など大量のベトナム人が難民（ボートピープル）となって国外に逃れる事態となった。

本レポートの空港での冒頭のシーンを憶えているだろうか。そのときのボート・ピープルやランド・ピープルは祖国、家族に物資や仕送りを続け、1989年入国ビザが認められるようになってから今、二十数年ぶりに祖国・家族のもとに戻ってきているのである。

ホーチミン空港での大勢の家族の出迎えシーンを想起する。

爽やかな風は30年の空白を洗い流し、逞しいベトナム人の未来に向かって吹かれているのだろうか。

帰国の日の朝、ホテルの部屋のカーテン越しから朝日が差し込み目が醒めた。

カーテンを開けるとサイゴン川が朝日で赤く染まり、我々がこの国に抱いている荒涼といったイメージとは無縁の静謐さに包まれている。

ベトナムを「寛容と潔癖」と表現した写真家もいた。

外を歩くと川に流れる「風」を感じる。

原生の風景は私を寛容に包み、そしてこの地にサイゴン川のように輝く未来を感じる。

ベトナムの風が確かにそう語りかけてきた。



2005年（平成17年）3月29日
澤井石油商事株式会社 澤井 篤司